

#### 4. 請西藩 第 3 代藩主 林忠崇(1848~1941)について

##### ① 林家は献兔賜盃(けんとしはい)の名誉を受けていた。

これは、室町時代に徳川家の祖先に林家の祖先が振舞った「兎の吸い物」によって徳川家の繁栄を招いたと考えられていたからであり、幕末にこの儀式を復活し、毎年元旦に諸侯に先んじて一番に盃を賜り、兎の吸い物を共にするという栄に浴していた。

##### ② 幕末の伏見奉行を務める

忠崇の叔父にあたる第 2 代請西藩主である林忠交(ただかた)が伏見奉行を務め、坂本龍馬を捕らえようとした寺田屋事件を所管していた。

##### ③ 林忠崇個人の評価も高い

忠崇は文武両道で幕閣の覚えめでたく、将来閣老になる器と評されており、遊撃隊の伊庭八郎とともに美男子とも言われていたようである。

##### ④ 藩主自らが脱藩し請西藩は唯一の改易された藩になる

叔父が亡くなり 19 歳で藩主を継ぐが、木更津に逃げ落ちてきた幕府の遊撃隊と行動を共にするため藩主自らが脱藩し、藩士 70 名(人数は諸説有り)とともに遊撃隊に参加し、箱根や奥州で新政府軍と戦うが負け続けた。そのため、請西藩は戊辰戦争によって改易された唯一の藩となった。

##### ⑤ 罪人として苦勞する

林忠崇は徳川家存続を知り、戦争の大義名分が果たされたとして仙台にて新政府軍に降伏するが罪人扱いとなり 25 歳まで謹慎する。その後は開拓農民となったり北海道で商家の番頭もやったり、困窮の生活を送る。

##### ⑥ 請西の名前を抹消される

請西藩の施設が木更津県庁になるが「請西」の名を避けるように桜井藩と変更されて使用された。

##### ⑦ 林家家臣により名誉回復がかなう

林家は旧諸侯で有りながら改易の事情から華族の礼遇が与えられなかった。しかし旧藩士による林家の家名復興の嘆願が認められ、47 歳にして華族の礼遇を受けるようになる。

##### ⑧ 大名の中で最後に息を引きとる

林忠崇は昭和 16 年まで生きながらえ「最後の大名」として 94 歳の生涯を終えた。「最後の大名」については他に異論も有るが林忠崇という説が主流である)

林忠崇氏と林家関係者がユニークな点を近藤が選定した。なお、厳密に言うと、万石以上の大名になった初代は忠英で、2代忠旭、3代忠交、4代忠崇となるが、陣屋を「貝淵」から「請西」に移したのが忠旭なので、「請西藩」初代は忠旭となり忠崇を3代と記載している。林家としては、大名になったことは関係なく、初代光政で、14代忠英、15代忠旭、16代忠交、17代忠崇となる。